



## 特集▼1

子どもたちの  
おしゃれ事情

### 身体と社会

世界の多くの社会において、個人の身体の望ましい形や色は、所属する集団によりある程度定められてきた。だが近年の日本では、毛髪をめぐって個人と集団の関係が揺さぶられている。

2016年3月、大阪市営地下鉄の運転手が、ひげを理由に低い人事評価を受けたとして市を提訴し、2019年1月に勝訴した。本件は「ひげ禁止訴訟」とよばれ、接客業で禁止されることの多いひげを個人的自由に属すると示したものである。2017年9月には大阪の府立高校生が「生まれつき茶色い髪」を、校則により黒く染めるよう指導されて不登校になったと府を相手に提訴し、翌年4月に府立高校の校則全般が見直された。このいわゆる「黒染め強要訴訟」の結果は、校則が無謬でないことを示しているといえるだろう。このように私たちの身体は、個人の私的な領域と、学校や職場といった公的な領域の両方に属しており、かつ両者の境界は交渉のもとにある。人は成長する過程で、私的なおしゃ

# 子どもが身体彩色 することの意味 化粧とネイルアートを中心に

## 風戸真理

北星学園大学短期大学部  
生活創造学科 専任講師

れを楽しんだり、校則などで定められた毛髪や衣服を装ったりするが、子どもたちはこれら二つの装いをどのように経験し、意味づけしているのだろうか。

### 大学生がふり返る身体彩色

筆者は文化人類学を専門とし、モンゴル国と日本における身体装飾の物質的な特徴と社会的な意味を比較しながら探ってきた。身体装飾は、「装身」(アクセサリーなどの着装)、「身体彩色」(化粧やネイルアート)、「身体変工」(毛染めやタトゥー、ピアッシングなど)の3つに分けられる<sup>1)</sup>。これらには各社会で特有の意味づけがなされており、かつその意味は時代によって変わり、一つの社会内部でも世代・性別・個人による認識の差異がある。

ここでは身体装飾のなかでも身体彩色に注目してみよう。身体彩色は身体に直接に彩色を施す装飾であるが、毛染めやタトゥーとは異なり、効果の持続が一日ほどとごく短期間である。具体的には、顔に塗る化粧<sup>2)</sup>と手指の先に塗るネイルアートを取りあげ、18〜20

歳の大学生の女性たちが生まれてから成人式を迎えるまでの約20年間(期間としては1998〜2019年)に、これらをどのように始め、感じてきたのかを述べてみたい。そこから、子どもにとっての身体装飾の意味の多面性を示していく。2019年現在、日本の民法では成年年齢を20歳と定めていることから20歳未満の者を子どもとみなし、大学生の過去を就学前・小学・中学・高校在学時に分けて述べていく。

調査方法は、アンケートと聞き取りである。アンケートでは2017年7月に日本の大学1年生、84人(18〜19歳。以下、子どもとよぶ)に化粧を初めてした時から今までの経緯を自由に記述してもらった。2019年1月、その中でとくにネイルアートに強い関心をもち色彩とファッションについて学んでいるNさん(仮名、調査時点で20歳)からネイルアートを中心とする個人の身体彩色ヒストリーを聞きとった。

### はじめて化粧をしたとき

アンケートから、子どもたちは早いと3歳

での七五三の際に写真館でチークと口紅を塗ってもらっており、遅い者でも大学入學式前日に道具を揃えて試していることがわかった。全体の21%が小学校まで、75%が高校の卒業式当日までに化粧を始めていた。

化粧を始めたきっかけと状況は、「自宅での母の道具を使って」、「友達に誘われて一緒に」、「習い事などの発表会で」、「女性親族(母・姉・オバ)にするように言われて」の4つに大きく分けられる。前の2つはある程度自発的、後の2つは受動的といえるだろう。就学前や小学生の時に自発的に化粧を始めた者は、家族から叱られたり、中学・高校での化粧や爪の検査に備えたりして控えめにしていた。

初めて化粧をした時の自身の変化を子どもたちはさまざまに回想するが、肯定的なものと否定的なものに大きく分けられる。

化粧をする自己を肯定的に捉えたものとして、「自分の顔が変わっていくのがすごく面白い」と自身の顔の物質的な変化を愛おしむものがあったり、「肌の悩みをファンデーションで隠せて肌が綺麗に見える」とコンプレックスからの解放を喜ぶものがあったりする。

がうかがわれた。

## Nさんの身体彩色イラスト

一人の女性は幼少期から20歳になるまでに、どのような社会環境において身体装飾を経験し、何を感じるのだろうか。成人式を終えたNさんの語りにより、ネイルアートと化粧に注目して個人の身体彩色ヒストリーを示していく。

Nさんの身体彩色は幼稚園児の時に結婚式に参列するのに母からマニキュアを塗ってもらったことに始まる。「化粧はいやで、爪がよかった」というNさんは、小学校4年生の頃には母のマニキュアを自分で塗るようになっていた。母もマニキュアを自由に使わせてくれた。

高校生になってはじめて自分のマニキュアを手に入れた。ドラッグストアで薄ピンク色の350円のを一本だけおこづかいで買った。当時は運動部に所属していて、クラスでも「爪は短くしないとダメ。切れ」と言われて頻繁に爪検査があったので、「短い爪にうすーくバレない程度」に淡いピンクのマ

また、「可愛くなれた気がする」、「雑誌のモデルに近づいたような楽しさがある」という審美的なプラスの評価、さらには「大人になった気分」、「一歩女性に近づいた気がする」、「化粧をしているというだけで気分がよかった」といった精神的な達成感や高揚感があげられた。

逆に否定的なものには、まず「何をしたいか、わからなくて大変」という全般的な困惑、そして「左右対称にアイラインや眉毛が描けない」といった化粧を施す具体的な技能や知識の不足が指摘された。次に「化粧品が肌に合わないとかゆくなったり、汗をかいてもおもいきり拭くことができないので、化粧をしていると不自由」など、化粧品へのアレルギー反応や行動が制限されることへの不快さが身体感覚として述べられた。受動的に化粧を始めた者の意見には「社会人に向けて始めたので楽しさはあまりない」とか、その後も「化粧をしないと周囲から浮くので最低限しているが、時間もお金もかかるし、今の日本の女性は化粧をしないといけないという風潮がづらい」と義務感に苛まれるづらい気持ち

ニキュアを塗った。教師にはわからないが、親しい友人など「見る人が見れば」わかるものだった。Nさんは「自己満足ですよ。塗ったら女子力あがる！ っと思って」と楽しそうに語った。同時に、ここでいう「女子力」は女子向けの魅力だといふ加えた。

Nさんによれば「男性はネイルアートがきらい。派手な色はとくにきらい」で、パール色のマニキュアをした友人にその彼氏が「血の色みたいって言った」と呆れる。男性が一般に受けいれるのは薄ピンクなど淡い色だけで、はつきりした色からは性格がきついという印象を受けていやがるという。しかし、女性の友人は違った。高校を卒業する少し前に、女性の友人がネイビー色のマニキュアをプレゼントしてくれた。彼女は、Nさんがふだん白・黒・茶色をベースとして柄物も取り入れた服装をしていることから「服に合う色」として紺色を選んでくれた。ちょうど運動部も引退して爪を伸ばしていた時で、とても気に入って、大学生になるまで「めっちゃつかって」という。

化粧を始めたのも高校卒業の少し前である。

「周囲がし始めていて、もう少して大学生になるのだから自分もした方が良いかなという焦り」から始めた。最初はチークとリップのみのナチュラルメイクにした。というのも、それまで「顔に何かつけるのがいやだった。部活もあつたしついていたら気持ち悪い」と思っていた。ところが、やってみると自分が化粧で変わっていくのが楽しくて、大学生になって3カ月目には下地・リップ・チーク・眉毛・アイライナー・マスカラなどを駆使した「バッチリメイク」を心がけるようになっていた。

大学生になるとマニキュアも買い集め、2019年現在約30本を所持している。入手方法のコツとしては、「一気にたくさんの色を試せる」雑誌の付録セットを見逃さない。たとえば、20代女性向けファッション誌『ELLE』の2018年8月号の付録として、ファッション・ブランド「MILKFEED」とコラボレートした夏色マニキュア6色に、トップコート（表面を覆う）1本とベースコート（下地を整える）1本のついた8本セットを手に入れた。単品では、憧れのブランドだった「シャ

ネル」の深緑色に「これまでになかった色！」と惹かれ4,100円で買った。2018年の誕生日には女性の友人が「いつも爪、きれいにしてるね」と、高校の友人がくれたのと同じ「THREE」のターコイズブルー色をプレゼントしてくれた。このブランドには、肌になじむくすんだ色やどんな服にも合うおさえられた色が多く、気に入っているという。Nさんは高校までは控え目に、大学入学後は存分に、色彩を用いた身体表現を楽しんでいるように見える。ただし、Nさんは飲食店でのアルバイト就労に従事していて、職場ではネイルアートを施すことや爪を伸ばすことが禁止されているのだという。爪を伸ばしてみても水仕事の時にふやけて折れやすいので、爪は短めにしている。マニキュアはアルバイトのない日に短い爪に塗って楽しみ、リムーバーで除去してアルバイトに向かう。このように、大学の学則等では装いに對する制限がなくても、アルバイト先で身体装飾が制限されることもある。

## 個人の自由と集団内のルール

子どもたちの多くは、高校卒業時まで化粧を始めていた。その中には、早くから自発的に「大人の女性」らしさを楽しむ者もいれば、高校や大学に進学する時にその社会的な位置づけに必要な装いとして受動的に始める者もいた。さらにいえば身体彩色には、顔にする化粧と手先の爪にするネイルアートがあり、子どもたちは自身の身体的な感覚、審美的な好み、親や教師との関係、部活やアルバイト等の活動での安全性、などを考慮して取捨選択していた。爪のおしゃれに関しては、男性からの不人気であることを知りながら、女性としてはマニキュアが喜ばれるギフトとなり、女性内部の価値にもとづいた身体彩色がおこなわれていた。

子どもたちの個人的な楽しみである身体装飾は、学校やアルバイト先のルールと折り合わないこともあった。そんな時に彼らは、親や教師には甘える面を見せる一方で、収入源であるアルバイト先のルールには自らの身体を合わせているようだった。個人の生活は、家族や友人との関係に代表される私的領域と、学校や職場などの公的領域の両方を包含して

いる。そして身体は、通学や通勤といった空間的な移動を通して、二つの領域の境界を日々越境して行き来しているのである。

「ひげ禁止訴訟」や「黒染め強要訴訟」で問題となった毛髪の長さや色は、短時間での変更が難しいことから私的領域と公的領域との境界が侵犯しあい、衝突しやすい場となっている。これに対して、化粧やネイルアートなどの身体彩色は短時間で着脱でき、一日のなかでも、平日と休日とでも切り替えが容易である。子どもたちは着脱のしやすい身体彩色を手始めに、個人の多様性と集団の規範とのバランスを自身の身体をもって試し、探っているのだと考えられよう。

1) 風戸真理 (2017) 「身体装飾をめぐる子ども・大人・社会の交渉」『コンタクト・ゾーン = Contact zone』9: 347-366。

2) 顔の装飾には、カラーコンタクトレンズやつけまつげの着装や、眉毛を剃る・切る、まつげを折って上向ける、一重まつげを糊付けして二重にするといったごく短期的な整形なども含まれるが、本稿では皮膚に塗って色や質感を変化させる化粧品の利用に限定する。